

有限会社 大坊建設



ユーザー訪問

柳谷 様邸

むつ市金曲

2024年4月竣工(予定)

■延べ床面積/30坪(99.37㎡)

■使用青森県産材/スギ(柱、ガレージ天井の格子、ガレージ引き戸、階段)など。

「葺」移築再生 白壁の家

むつ市の新田名部川に架かるむつ大橋を渡る途中から、対岸に真新しい白壁の住宅が見えていた。橋を渡って左折し、真っ直ぐ伸びる土手道を進む。実はこの道、今から5年前の2018年にも通ったことがある。それもそのはず、白壁の家の向こう隣りに建つ柳谷様邸を取材に來たのだった。施主の柳谷様が、同じ(有)大坊建設で建てた2軒目の家が、今回ご紹介の「葺」を移築再生した白壁の家なのだ。1軒目も2軒目も築100年以上経つ古材を生かし、建てた工務店が大坊建設であるのは共通するが、それよりも柳谷様が2軒目を建てることになった経緯に強く関心が惹かれた。

古材に新たな時が刻まれる

重さ300kgもある、尺角で通しのケヤキの大黒柱が家を支える

「肘木」で支える技

建てることになった経緯、
よりも、わずか5年の間に家を
2軒も建てるなんてすごい！
そう驚くのが正直な反応だろ

う。2軒目を、建てよう、と思っ
たのではなく、実際に、建てた、
のだからすごい。そう思いなが
ら白壁の家の正面に立つ。間口
5間、奥行3間の総2階で延べ
30坪。半年前の6月に現場を拜



窓のように見える壁の「四角」は一つ一つ内法寸法が違うため、大工がそれに合わせて寸法を測り、下地の石膏ボードを切って張り付けた

見したが、1階はがら
んどうのガレージで
あった。その入り口に、
1間幅の引き戸が2
枚建っている。ガレ
ージにはもったいないく
らい立派な無垢のス
ギの戸。その隙間か
ら、大工の作業音が聞
こえてくる。まだ工事
が若干残っていて、完
成は年明けになりそ
うだ。

「別に急ぎませんから
ね。住む家も隣にある
し。わたしも中の内壁
のペンキ塗りとか楽
しみながら参加して
るんですよ」と笑って
話す柳谷様。

1階のほぼ中央に



立っている大黒柱。その太さ。存
在感。つい近づいて、触れてみ
る。幅は1尺もある。約30cm。そ
れが2階の天井まで立ち上
がっている。この尺物の通しのケ
ヤキの大黒柱の重さが実に3
00kg。白壁の家の「主」のよう
な存在だ。

半年前にはまだなかった階
段が付いていた。大工手作りの
スギの階段。上がり口の横の壁
に「階段の写真」が貼り付けら
れていた。「こういう階段にして

ほしい」と柳谷様が雑誌から切
り抜いておいたものだそうだ。
元は「蔵」の黒い古材に囲まれ
た小暗い中に、新しいスギ板の
階段が違和感なく納まっている
のは、階段の飾らないレトロな
デザインが溶け込んでいるから
だろう。

白壁の家のこの2階で、「肘
木」という部材を初めて目にし
たのだった。大黒柱のてっぺん
と、天井を支える太い丸太の棟
木の接するところに、肘を乗せ



大黒柱のてっぺんにかかる棟木の荷重を分散させるために「肘木」が挟まれている

たように、横に「かませている」木が「肘木」だ。大黒柱のてっぺんにかかる棟木の荷重を、間に木を挟むことによつて分散させる「技」なのだ。太い木の重さ、力強さ、逞しさ。それに対して、木を現わさず壁の中に隠してしまう。現代の住宅から感じられなくなつたものが、木の力強さなのだと思ひ知らされる。

内壁一面に、5寸角の縦の「柱」と、横の「貫」とが直角に交差した「四角」が並んでいる。柳谷様が指差して、「これが真四角でなく、一つ一つ寸法が違うから材の表面を真つ平にカンナがけしたものではないから、四角の寸法がそれぞれ微妙に違うのだ。」それで大工さんが一つ一つ測つて、その寸法に合わせて石膏ボードを切り、それを一枚一枚張り付けたんです。すごい手間でしたよ」

新田名部川が見える窓にも、その「四角」が並んでいる。壁ではなく、開口なのに……。こういう造りも初めて見た。「ふつうなら窓の部分を切り取つてしまふんでしようけど、あえてそのままにして、その外側にサッシ窓を付けてもらったんです。そのほうが、元の蔵だった風情を感じられますでしょ」と柳谷様。オンリーワンの窓にご満悦のようだ。

大坊建設と出会う

ここで、柳谷様と大坊建設との繋がりと、古材にこだわる柳谷様の「思い」を整理してみる——。5年前にさかのぼる。

新田名部川沿いに柳谷様が自宅を建てたのは、川が流れる静かなロケーションが気に入って土地を求め……。ということではない。柳谷様のご両親の家（築40年）がもともとここにあり、ご両親が移り住んだ後の家を解体して、自宅を建てたのだ。柳谷様にすれば、自分が生まれた実家の跡地が新しい生活の場として「恵まれた」ので





元の蔵だった風情が感じられる、新田名部川を望む大開口の窓。柱と貫が交差する外側にサッシ窓がある

ある。

ここからすぐに大坊建設と結び付いたわけではない。柳谷様が依頼した仙台の設計事務所と作業を進めている間に、大湊にある柳谷様の父親の実家が解体されることになった。柳谷様はこう振り返る。

「築120年になる本家で、そこには伯母が住んでいましたが、わたしが建築士に設計依頼した時点ではまだ建て替えの計画はなかったんです。解体すれば古材が発生します。120年もの思い出が刻まれた古材を利用しない手はありません。実はわたし、以前から雑誌などで読んで古民家に惹かれていたんです。その古材をぜひわが家に使いたい、と建築士に伝えました」

図面が出来上がり、次は工務店探し。むつ市内の古民家を建てているというある工務店に声をかけてみたら、「外注は受けない」と断られた。自社で設計し、施工するのが方針だとい





新たに取り付けられたレトロなデザインのスギ板の階段



1階のガレージ。天井に張ったスギの格子が美しい

う。けれど、親切にも青森市にある工務店を紹介してくれた。『青森県古民家再生協会』の会長であった。ところが、手がいつばいで請けられないという。だけれど、ここでも人に恵まれた。「当協会の会員が田子町にいるので、紹介します」と会長。閉ざされた門戸が開いた。その会員が、大坊建設であった。

のままにしてもらいました。そのほうが一目で「昔の木」だと分かりますからね」
完成した柳谷様邸は——『板張りの外観は新しかったが、中に入ると、土間と居間の仕切りに架かる梁も、その梁を受ける5寸5分の大黒柱も黒色だった。客室の引き戸はベンガラ色……。なるほど築120年の父親の実家の古材を生かして建てた古民家であった』
（『青森県産材の家』No. IXより）
柳谷様の話
「120年も『時』が刻まれた木材



階段の上部に灯る仄暗い照明が100年前の空間へ誘うよう

や建具を生かすということは、木の命を引き継ぐということではないでしょうか。ここに住んでいると、ご先祖に守られているような気がして、落ち着くんですよ」

そう言いながら、板敷のリビングを見回していた5年前の柳谷様のお顔が浮かぶ。

友人の一言が発端

——「古材」が好きなことと、「古材」で2軒目の家を建てることは、「夢」と「現実」ほどにかけ離れているはずですが、どんな経緯で建てることになったのでしょうか？

柳谷様の話 「初めはね、まったく計画していなかったんですよ。瓢箪から駒じゃありませんけど、きっかけは遊びにきた友だちの一言でした。家の左隣にある土地が空き地になっているのを見て、その友だちがこう言ったんです。そこ買えばパーベキューできるじゃん、つて。そういうえばそうだなと、そのときは軽く受け流したんですけど、建てた家の土間スペースを『カフェ』にしようと計画していたので、そうなるって駐車場が必要なんです。そこからだんだんと考えが動き出していったんです。ま

ず仲介の不動産屋に当たってみました。結論から言いますと、土地だけでは売らず、土地・建

物が条件でした。建物を建てる条件付きで売る土地だったんです。縁がないと諦めました



室内の雰囲気に合わせキッチン周りに張ったタイルも黒色に



お気に入りの「ここが一番落ち着く場所」

が、空き地はもう一つ、反対側の、家の右側にもあったんです。駐車場にするだけにはもったいないほどの広さがあります。忘れもしません、そのときに、家を建てている最中に大坊社長が言っていた話が蘇ったんです。『蔵を解体した古材が（大坊建設の）倉庫にある』と。大坊さんによると、あるお客さんが古材で家を建てることになって、その材料として二戸の築100年以上になる蔵を解体した木材を調達したのだけど、いざ建てる段になったら、お客さんのほうに問題が生じて、建てられなくなつたんだそうです。10年前のことで、その古材がそっくり倉庫に眠っているのだから。聞いたそのときは別に何とも思つてなかったんですけど、その古材を使って蔵を建てたらどうか——と天啓みたいに閃いたんですよ。

そうこうしているうちに“縁”は向こうからやってきました。月に何回かオープンする



2018年に竣工した当時の1軒目の家の外観(上)と居間。現在は「kaffe tyst」として使われている

副業として始めたカフェにいらしたお客様が、その空き地の地主の奥様だったんです。お顔だけは知っていました。こちらがその土地を取得したいと思っています。そのことは、もちろん奥様は知りません。すると、奥様のほうから土地にまつわる話をし出したんです。土地を持って

ても、子供はそこに家を建てるつもりはないこと。となると、いずれは売りに出すしかないこと。縁が転がり込んだような話です。それから半年ほどして、その土地の草刈りをしていた奥様のご主人にそれなりに買いたい意向を伝えました。売り値と買い値の金額を同時に提

示したら、ほとんど差がなく、しかも間に不動産屋が入っていません。なかつたので得な買い物で、これもまた「恵まれました」——「いったんは「壁」にぶつかっても、開けますよね。1軒目のときの大坊建設もそうだったし、今回の土地の件も。柳谷様の話（「笑顔になって

自分から言うのも何ですけどね、わたして、恵まれるんですよ。親の土地・建物が自分に譲られたのを手始めに、家を建てようとしたら祖父母の本家が解されることになってその古材を使えるようになったこと。古材で建てるむつ市の工務店に当たったら都合が悪かったけど、青森市の工務店を紹介してくれました。あいにくこも仕事を手一杯だったけど、古民家再生協会の田子町の大坊建設を紹介してくれた。物事を進めようとする壁が立ちほだかるのだけど、いい方に転がるんですよ。ありがたいことです」

土地が手に入った時点で、すでに柳谷様の脳裏には蔵の古材で建てる2軒目の家が見えていたのだろう。建ててもらうのはむろん大坊建設。蔵を解体した古材が倉庫で眠っていると、大坊社長が話していた古材の「嫁ぎ先」が10年ぶりに決まったのだ。

——2軒目がすっかり完成す

れば、住まいは向こうに移されるのですね。

柳谷様の話 「そうですね。こっちはカフェで、向こうは住宅と言うより蔵です。蔵の2階に住むのです。古材で家を建てているというのではなく、あくまでも二戸から蔵をここに移築して、そこに住むという感覚ですね。家」というよりも、わたしにとつては「作品」なんですよ。ものづくりですね。ですから、大工さん任せじゃなく、わたしも参加して、これからもまだ終わっていない内壁の四角の部分にペンキを塗ります。2階の居住スペースはあらかた終わったけど、1階のガレージはこれからです。数えてはいませんが、かなりの数ですよ。楽しんでながら塗ります」

定員4人のカフェ

柳谷様から頂戴した名刺の『kafé tyst』をネット上で検索してみた。窓辺の席でお客様がコーヒーを飲んでいる



窓ガラス越しに川を眺めながら一人に浸る。コーヒータイムが味わえる

写真から漂い出る雰囲気は「静かさ」である。コーヒーを飲みながら二人に浸る「ひとときを提供する。『tyst』とは「静かな」という意味のスウェーデン語だそう。定員は4人。1人1席で、4席。友だちと会話しながらの喫茶店とは真逆に、話し声はなく、それぞれが、窓

ガラス越しにすぐ目の前を流れる川を眺めながら静かに過ごす。

「オープンしたのは家が完成した翌年の2019年11月です。勤めながらの副業ですから土日を中心に月に2〜6日程度が営業日です」と柳谷様。「SNSで発信していますからそれ

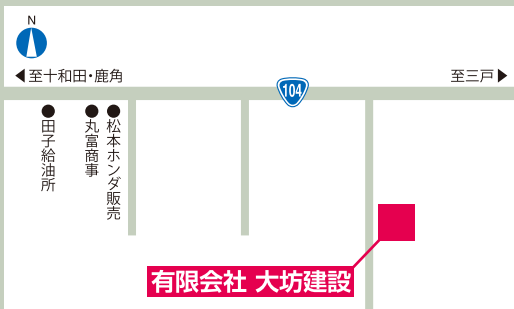
を見て探して来てくれたり、今ではご連絡もいますし、それにこの土手道は散歩コースになつているのでオープン日には入り口に掲げる看板を見て寄つてくれたりね」

本業、副業の「カフェ」、「蔵」づくりと多忙はまだ続きそうだが、柳谷様にしてみれば「ものづくりに親しむ」充実した日々であるに違いない。



有限会社 大坊建設

本社 ●三戸郡田子町大字田子字下田子69-4
TEL.0179-32-3580 FAX.0179-32-3582
<https://daibou299.com/>
E-mail: kouki299@leaf.ocn.ne.jp



有限会社 大坊建設